

Title	現代のアンチテーゼ：米文学にみるアーミシュの生き方
Sub Title	An antithesis of the World : The Amish way of life as written in American literature
Author	山本, 晶(Yamamoto, Sho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.71(316)- 98(289)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林真両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代のアンチテーゼ

米文学にみるアーミシュの生き方

山 本 晶

101 アメリカ合衆国25州とカナダ、グアテマラなどに広範囲にわたって、「アーミシュ」(Amish) と呼ばれる人びとが住んでいる。かれらの祖先は十七世紀スイスで再洗礼派のひとつメノウ派 (Mennonite Anabaptists) から分離した宗教集団であるが、十八世紀前半、迫害を逃れてヨーロッパから米国東部のペンシルヴェニアに移住してきたものである。その名は指導者ヤーコブ・アマン (Jakob Ammann) に由来し、別名を「ペンシルヴェニア・ダッチ」としても知られる。ダッチと言ってもオランダ人ではなく、英語でまた「ペンシルヴェニア・ジャーマン(ズ)」とも言うように、ドイツ系である。「ダッチ」は“Deutsch”の転訛だという説もある。いずれにしても、ヨーロッパのアーミシュは消滅してしまい、今は主としてアメリカ大陸で確固とした生き方を示しているのである。

本稿の目的は、次に挙げるアメリカ文学の作品3篇にアーミシュの特徴がどのように描写されているかを指摘し、これに解説と考察とを加えることにより、現代のアンチテーゼを提供するところにある。

- ① W・ケリー、E・W・ウォレス『目撃者』(1985)
- ② S・ベンダー『プレイン・アンド・シンプル』(1989)
- ③ M・ジョーダン『アーミシュに生まれてよかった』(1968)

これをジャンル別に見れば、①は小説、②はエッセイ、③は児童文学に属するであろう。本稿では①を主たる検証の対象とし、②、③によって少しく補う方法をとりたい。殊に①は映画版もあるので——というより小説は映画のノヴェライゼーションであるが——小説が映画と異なるところで、

指摘して意味があると思われる事柄はこれを取り上げることにする。ちなみに、映画は日本封切りの題名を『刑事ジョン・ブック／目撃者』と言い、1985年度米国アカデミー賞の選考で、オリジナル脚本賞および編集賞を受賞した。同年度の英国アカデミー賞では作曲賞に選ばれている。

102 アーミシュの生き方を一言以て覆えば、すなわち「忌避」である。かれらはドイツ語で「マイドゥンク」(*Meidung*)と言うが、英語では「シャニング」(*Shunning*)と訳す。忌避とは、現世的なものを「回避または隔離」(*Absonderung*)するということで、本来キリスト教徒が守るべき教理の中核に位置するものである。それは次のようなパウロ書翰に根拠を置いている——「この世に效ふな、神の御意の善にして悦ぶべく、かつ全きことを辨へ知らんために、心を更へて新たにせよ」(ロマ書12：2)、「不信者とくびきを同じうすな、釣合はぬなり、義と不義と何の興かりかあらん、光と闇と何の交はりかあらん」(コリント後書6：14)。

本来これがキリスト教徒の拠るべき根本なのであるから、何もアーミシュの生き方が嚆矢ではない。初代キリスト教会に始まり、中世カトリシズムでも、禁欲のプロテスタンティズムでも保持されてきた大原則である。ところが、宗教の国教化が進むにしたがい、宗教的なものと現世的なものとの間に「妥協」(*Kompromiß*)が計られ、たとえばカトリック圏では、この原則を修道僧に限定して、必ずしも厳格に一般信徒を拘束しないようになった。十六世紀の宗教改革とは、このような妥協に対する反動なのであって、初代キリスト教会への回帰を求め、忌避の教理を全信徒に対して要請する運動であった。その主張に最も熱心だったのが再洗礼派である。だが、現世の権威と利益を排し、教理の信奉と実践との厳格な一致を求める非妥協的な生き方は、時の権力——政府および教会——や周辺農民との間に激しい摩擦を惹き起こし、苛酷な迫害を招くものになった。すなわち財産没収、家屋破壊、領外追放。さもなければ男は槍による刺殺、女は水漬けによる窒息死などの刑に処せられたのである。

それでも再洗礼派を転向させることはできなかった。しかしながら、かかる残酷な仕打ちを受けては誰しも同じ地に留まれるものではない。やむ

なく人びとは転々と諸方に逃れた。「この町にて責めらるる時は、かの町に逃れよ」(マタイ伝10:23)とはイエスも教えるところである。そのような困難を極めた状況にあって、かれらは更に新たな難問に直面した。ほかならぬ、根本教理である忌避の基準について、どこまで現世と妥協するか、深刻な意見の対立が生じたのである。その事情は非常に興味深いものではあるが、今は省略につくことにして、要するに、この対立から派生したのが、あくまで厳格な忌避を主張してやまない「アーミシュ」であった。だが、各国は連帯して再洗礼派を地上から抹殺することを図ったから、かれらの内で最も過激なイデオロギー集団たるアーミシュはなおのこと、もはやヨーロッパに留まることはできなかった。

103 アーミシュがアメリカに移住し始めたのはいつのことか、いろいろ説はあるものの、はっきりした年次は分からない。ただ、クエイカー教徒のウィリアム・ペンが1681年に創設したペンシルヴェニア(「ペンの森」)が他所よりも信教の自由が保障された土地であったので、十八世紀の初頭から中葉にかけて数次にわたり渡航してきたものらしい。このように信教と実践との自由を求めて、この地に移住した者はアーミシュに限らず、メノウ派、シュヴェンクフェルト派、ドゥンカー派、モラヴィア派、ルーテル派、改革派なども同様であって、これら小教派はみなドイツ系であるから、こんにちペンシルヴェニア東南部一帯を「ペンシルヴェニア・ジャーマン(またはグッチ)・ランド」と呼ぶのである。知られている最も古い文書によれば、アーミシュは1809年に9条からなる「條款」(*Artikel*)を決議した。そのうち最初の6条は背教者の分離・戒告、忌避などについての定めであるのに対して、第7条は髪やひげの刈り方、第8条は陪審員になることの禁止、第9条は現世的衣服の否認に関する定めであることが注目される。頭髪やひげ、衣服などのスタイルについては後述する。陪審員にならぬとは訴訟に関わらぬという意味であり、それは「なんちを訴へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ」(マタイ伝5:40)との教えに基づいている。この例や、これから挙げる例が示すように、アーミシュの慣習はことごとく聖書至上主義に拠るのである。以下、拠って立つとこ

ろの主たるものを列挙すれば、

- ①農業中心の生活「エホバ神、彼をエデンの園よりいだし其の取りて造られたるところの土を耕さしめ給へり」(創世記3：23)
- ②没我的人生「人もし我に従ひ来らんと思はば、おのれをすて、日々おのが十字架を負ひて我れに従へ」(ルカ伝9：23)
- ③制度的教会の否定「神は、天地の主にましますば、手にて造れる宮に住み給はず」(使徒行伝17：24)
- ④長老への服従「若き者よ、なんぢら長老たちに従へ」(ペテロ前書5：5)
- ⑤成人洗礼(幼児洗礼の否定)「なんぢら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んために、イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ」(使徒行伝2：38)
- ⑥男性優位「われ女の教ふることと男の上に権を執ることとを許さず」(テモテ前書2：12)
- ⑦兵役の拒否「なんぢ殺すなかれ」(出エジプト記20：13)
- ⑧偶像の否定「なんぢおのれのために何の偶像をも彫むべからず」(申命記5：8)
- ⑨食事をともなう集会「この故に、わが兄弟よ、食せんとて集まるときは互ひに待ち合はせよ」(コリント前書11：33)
- ⑩高等教育の否定「そは此の世の智慧は神の前に愚かなればなり」(コリント前書3：19)

104 アーミッシュは老若男女の別こそあれ、それぞれの範囲では、みな同じような恰好をしている。他人と異なる姿をして目立つことを避ける考えが徹底しており、その根底にはプライド＝高慢の念を抱くことを許さないという信仰上の理由がある。自慢をするのは最も忌むべき罪なのである。したがって、この戒律を守るための具体的実践の形はいろいろあるのだが、そのうち外見的に顕著な例を以下に挙げておこう。

- ①男は頭髪をボウル・ヘアカット (bowl haircut) にする。
- ②男は結婚前はひげを剃り、結婚後はあごひげを生やす。
- ③男は夏は麦わら帽子(黒のバンドつき)、冬は黒のフェルト帽(黒のバンドつき)をかぶる。
- ④男はズボンにベルトを使わず、ズボン吊りを用いる。
- ⑤男女とも原則としてジッパーやボタンを使わずホック (hooks and eyes) を用い、女は衣服をとめるのにストレート・ピンも用い

るが宝石類は身につけない。⑥女は9歳まではワンピースの上に肩まで覆う子供用エプロン (pinafore) をつけ、9歳になると腰から下を覆う裾まで長いエプロンに切り替える。⑦女は髪を切らず編まず、真中で分けて束髪に結び、ふだんは白のオーガンジーの頭巾 (*Kapp*) をかぶる。⑧成人女性は通常ワンピースの上にケイプ (*Halsduch/Bruschtuch*) をつける。⑨老女は黒に近い灰色のケイプを身にまとい、幅広のふちがついたボンネットをかぶる。⑩喪中の女は一定期間、黒の喪服を着る。

総じて仲間うちで同一のスタイルを守るのは「平和のつなぎのうちに勉めて御霊の賜ふ一致を守れ」(エペソ書4:3)との教えに忠実であろうとするからなのだが、さらに個別的に言えば、上記のうちたとえば⑤の後半や⑦は、「女は恥を知り、慎みて宜しきにかなふ衣にておのれを飾り、編みたる髪の毛と金と真珠とあたひ高き衣とを飾りとせず」(テモテ前書2:9)、「すべて女は祈りをなし、預言をなすとき、かしらに物を被らぬは其のかしらを辱しむるなり」(コリント前書11:5)との教えに基づく。風俗的に見れば、要するに十七、八世紀のライン川上流一帯に住んでいた農民のスタイルをこんにちも墨守しているわけである。だが、アメリカのように、他人と同じであることを潔しとせず、個性を発揮することを最上とする国にあって、以上のような画一的なスタイルは、それだけをとって見ても、アーミシュを特異な存在にしている。なるほど、アーミシュ社会の内部に限って見れば、互いに目立たぬ姿をしているのだが、広くアメリカの一般社会にあっては、反ってみずからを極立つ姿にしているのが皮肉である。しかしながら、それは何もアーミシュの関知するところではない。かれらはひたすら放っておいてほしいのである。

子沢山で身内の多いアーミシュ社会では、生涯のかなり長きにわたって喪服を身につけたまま過ごす女も珍しくない。男は常に黒衣をまとっているから問題はない。いずれにせよ、アーミシュの男女が平生身につけるシャツやブラウスの色は派手な赤、オレンジ、黄、ピンクを避けて紫、青、緑が多い。これらは外界の感覚からすると決して地味とは言えず、かれら

が一樣にこれらの色の範囲で身を装っている姿は反って目に鮮やかに映るのだが、これとともアーミシュの関知するところではなく、単に現世的服装 (*Welttrachten*) を排し、自家製の衣服をまとっているだけなのである。

105 アーミシュが用いる日常言語はペンシルヴェニア・ジャーマン (またはダッチ) と呼ばれる、若干の英語が混じった低地ドイツ語の一方言である。ただし、礼拝や葬式、結婚式などの宗教的儀式においては、高地ドイツ語が使われる。聖書はルター訳が用いられ、十六世紀スイスの再洗礼派が作った『アウスブント』 (*Ausbund*) によって讃美歌を唱い、『祈禱書』 (*Die Ernsthafte Christenpflicht*) によって祈る。これらも説教も、すべて標準ドイツ語でなされる。家庭における食前食後の祈りも同様である。要するに、アーミシュ社会は合衆国中のドイツであるが、それも300年前の南ドイツの農村が化石のように移転した形で存在しているわけである。だが、周囲は一般アメリカ社会の大海であって、これと全く接触することなしには生きてゆけない。そのためには英語が不可欠である。したがって、アーミシュは三重言語使用者ということになる。

たしかに、アーミシュが移住してきたのは、まだ合衆国が独立する以前のことであった。ウィリアム・ペンが創設したペンシルヴェニアは、英国王チャールズ2世の勅許状を得たればこそ拓きえた英領植民地だったのである。しかし、こんにちアーミシュがよく用いる「イングリシュ」または「イングリチャー」 (*Englischer*) は、文字通りのイギリス人を指すわけではなく、旧派アーミシュ以外の人びと全てを指す。「彼 (または彼女) はイングリシュになった」 (“He/She went English.”) と言え、 「やつは異端になった」の意である。自分たちと同類か、異端か。こういう極端な二元論に立つ選民意識とライフ・スタイルを、アーミシュは植民当初から保持しているわけである。

201 小説版であれ映画版であれ、『目撃者』はアーミシュ村の葬儀の場面から始まる。映画では字幕に「1984年／ペンシルヴェニア」と出るが、小説では時期を特定していない。1984年と言え、作品発表の前年、つまり製作中に当たろう。ヒロインのレイチェルが12年つれそった夫、ジェイ (294)

コブ・ラップが農業用機械の事故で命を落としたのである。葬儀はドイツ語で執り行なわれた。アーミシュにとって、人の死は深い悲しみをとまなう事実であることに変わりはなくとも、死を収穫が終わったあとの刈り株が朽ちて土に還ると同じく、讃うべき神の御業の一部と捉え、それを「エホバ与へ、エホバ取り給ふなり」(ヨブ記1:21)と説明する。神の御旨にかなうことなのであるから、葬儀は一種の祝祭とさえ看做されている。旧派のアーミシュ村に制度や建造物としての教会はない。死者の家における儀式から、出棺、墓地での儀式と埋葬、そのあと死者の家に戻っての食事にいたるまで、近隣の者がこぞって手助けをし慰めを与える。こうしてキリスト教徒はまた勝利を納めたことになるわけである。

家族の絆が強く、村びとによる相互扶助の精神に富むアーミシュ社会では、死に向かう老齡期にあっても「明日のことを思ひ煩ふ」必要は全くない。老人は年を経るにしたがいますます大切にされ、引退するときは若い衆が跡を継ぐから、老人は隣接して建てた隠居(*grosdaddihaus*)に引越すだけでよく、村の老齡年金が保障されてもいるので、世俗の社会保障制度や商業的生命保険に加入しておく必要もない。老人に限らず、アーミシュ社会は誰でも衣食住や失業を心配することのない、確固とした自給自足の体制に支えられているのである。これは何も外界の人間が考える通俗の親孝行や社会福祉の実践ではなく、ありようはひたすら信仰に基づくのである。聖書も教えているではないか、「人もし其の親族、殊におのが家族を顧ずば、信仰を棄てたる者にて不信者よりも更に悪しきなり」(テモテ前書5:8)と。

この教えの直前には、レイチェルのような寡婦について、次のような教えも示されている。「まことのやもめにして独り残りたる者は望みを神におきて、夜も昼も絶えず願ひと祈りとを為す。されど楽しみをほしいままにするやもめは生けりといへども死にたる者なり。これらのことを命じて彼らに責むべきところなからしめよ」(同書5:5-7)と。レイチェルは文字通り「独り残りたる者」ではなく、義父イーライと、11歳になる息子サミュエルがいる。だが、実を言うと、彼女にはみずから「責むべきとこ

ろ」があって、そのことを誰も知らなかった。

202 レイチェルは15歳のとき、両親と弟アロンとを交通事故で亡くしていた。三人の乗った馬車がトラックに衝突されて即死し、あとには2歳上の姉レベッカとレイチェルとだけが残された。姉は躁鬱病にかかり、診てもらったメノウ派の精神科医と恋におちて結婚し、自動車を禁止するアーミシュの教えから逃れるように、今はホールティモアに住んでいる。父のジョウブ・ヨーダーは監督（Bishop）をしていた厳格な人物で、レイチェルは父が母をひどく抑圧していると感じていた。母は秀れた教師だったが、アーミシュ学校に関する論議への参加や、旧派アーミシュの図書館を作りたいという希望を、父は頑として認めなかったからである。孤児となり叔父のイーラム・ヨーダーの世話になるようになって、レイチェルは礼拝に出なくなり、神の存在から高等教育を排するアーミシュの習慣まで、すべてを疑うようになった。結婚するに際し、夫になるジェイコブの優しい説得に負けて洗礼を受けはしたが、アーミシュは近親結婚が多いせいか、知恵おくれの子供が生まれやすく、躁鬱病の患者も目立つので、レイチェルは子供をつくることについて夫と激しく議論をしたこともある。妊娠してから不安はつきまとい、3年間も夫を拒み通した。義兄の診断により生まれた男の子が健常児であると分かってからは普通の夫婦関係に戻ったが、義兄が処方してくれた避妊薬を密かに使うようになった。

夫と死別した今、しきりに姉と会いたい気持がつる。会って人生について、アーミシュとしての自覚について、息子の将来について、夫婦という不思議な関係について話し合いたい。自分の30年にわたる来し方を見つめ直したい。そのためには、体の弱い姉がこちらに来られない以上、自分の方から息子を連れてでも向こうへ出かけねばならない。ところが、このような内面の動揺を知るよしもない義父は、急に持ち出された話に強く反対した。村を離れることも、孫を外界にさらすことも、鉄道を利用することも、みな墮落につながることになるという。二人の話し合いは口論になり、やむなくレイチェルは村を出る理由をダニエル・ホフライトナーから逃げることだと説明した。夫の死後、いつも家に来ている背の高いハンサ

ムな男のことである。夫の友人だったダニエルは性格も身のこなしも、笑い顔もユーモアのセンスも夫にそっくりで、義父や息子と非常にうまく行っている。アーミッシュ社会では、夫を亡くした女は遅くとも1年以内に再婚の決心をつけることが期待されており、義父も既に快くダニエルを受け容れている様子なのだが、レイチェルにはそれでは余りに安易すぎると思われてならないのだった。二人は更に口論になったが、レイチェルは再婚するつもりは今のところないと、驚く義父に対してきっぱりと告げた。今まで一度も出たことのない村から外界へ出て行くとは、その問題に文字通り「距離を置く」ことでもあったのである。

203 前項は小説版の冒頭部分をかいつまんでみたものであるが、映画版にはこうした事情は一切出てこない。葬儀が終わったあとの村のたたずまいを見せてから、どういうわけか理由は示されぬまま、母子は義父の馬車でランカスターの鉄道駅に向かう。駅にはダニエルも姿を見せる。義父はむしろ穏やかな顔でほほえみさえしており、ただ列車に乗り込むレイチェルに向かって、「イングリッシュには気をつけろよ」と言うのみ。小説版にこのセリフはないが、映画版では初めと終わりとして義父に同じことを言わせて、呼応するアクセントにしている。しかも終わりの方は——小説版にもあるが——当の「イングリッシュ」である刑事ジョン・ブックに対して言うところがミソである。

一方、小説版では、見送り駅でも義父は腹立たしい思いでいる。たまたま駅前を通りかかったダニエルが、レイチェルの家の馬車を見て、誰かの出迎えかと思い近づいてくる。実は出かけるところと知り、それも自分(ダニエル)のことをも含めて将来のことを考えるために姉のところへ行くのだと、レイチェルから説明を受けて、旧派の伝統を守ることにかけては厳しいダニエルも理解を示す。だが、レイチェルにはこの男が守っている伝統がうとましいのである。村を離れる列車に乗っていても、子供は一人でたくさんだと思う。そういう考えはアーミッシュの習慣に反することであり、それは取りも直さず信仰に背くことであると承知しているだけに、自分はメノウ派になろうとして姉のところへ向かっているのだろうかと思い悩

む。映画には、こうした内面の煩悶は一切表現されていない。ただ、これまで見てきたところだけでも、アーミシュの特徴がいくつも示されていることが分かるであろう。

204 アーミシュのライフ・スタイルに欠かせないのは、バギーと呼ばれる馬車である。かれらはよく「自動車を拒否するアメリカ人」と形容される。こんにちアメリカのような自動車王国にあって、それは「現代文明を拒否する人々」とほとんど同義になるであろう。移動の手段としてアーミシュは、徒歩でなければ馬車に頼る。前述したように、レイチェルが孤児になったのは交通事故が原因であった。アーミシュの黒い馬車は、特に夜間の走行時、自動車からは見えにくい。そういう危険を防止するため、当局は自動車道路に沿って馬車道を付設したり、馬車に安全灯をつけることを義務づけたりしている。映画版で、レイチェルが息子と共に義父の馬車で駅に向かうとき、村から街へ出る交差点で、はげしく行き交う車の交通量に圧倒されて立ち尽くすかのように、しばし停止する馬車のうしろ姿は、自動車文明と馬車文明との対比を鮮やかに示す印象的シーンであるが、その馬車の後部についている大きな三角形の赤色安全灯に目をとめた人もいであろう。それは馬車に積んだ電池によって点灯するもので、小説版にも馬車の電池のことが半ばすぎに出てくる。基本的には自動車と共に電気を拒否し当局の権威を否定するアーミシュも、馬車に電池式安全灯を使用するところまでは、現世と妥協したのである。

そもそも鉄道を拒否するのだから、自動車や飛行機が認められるわけではない。電気を拒否するからには、照明用電灯や電話、テレビ、その他の電化製品が許されるわけもない。アーミシュ村には電柱が立っておらず、したがって電線も張られていない。映画版の比較的初めの方で、スクリーンの横一直線に電線が映る。ふつうなら撮るのを避ける電線はアーミシュとノン・アーミシュとを隔てる境界線を象徴している。一方、小説版でレイチェルは、電話を持っているメノウ派の隣人に頼んで、ボールティモアの姉に、これからそちらに向かうと伝言してもらっている。アーミシュの中には、電話も自動車も自分が所有するのはいけないが、他人が所有するも

(298)

のを利用させてもらうのはかまわないのだと言う者がいる。所有すれば貪欲の罪に連なるからである。先にも触れたが、レイチェルと義父とがボールティモア行きに関して言い争いになったとき、レイチェルは冬になるとフロリダに行くアーミシュが自動車や鉄道を利用しているのではないかと指摘し、義父はそれを「ニュー・アーミシュ」だと説明する。ここに表われているのは、アーミシュの分裂状態である。

新派は「ビーチー・アーミシュ」とも呼ばれている。ビーチー (Beachy) とは、1927年にペンシルヴェニア州サマーセット郡で旧派アーミシュから分裂した進歩派を牧するモーゼス・ビーチーの名に由来する。ちょうど左翼が際限もなく分裂するように、イデオロギー集団たるアーミシュもヨーロッパ時代からアメリカ移住後を通じて、現世への妥協の限界に関する意見の相違がもとで、いくつもの小分派に割れることを繰り返してきた。『目撃者』に見るアーミシュはオールド・オーダー、つまり旧派であって最も保守的なのだが、レイチェルの指摘は、旧派の内部にも規範とは異なる行動様式をとる者がいることを示している。ほかならぬ、レイチェル自身も離れてゆこうとしているかに見える。

205 レイチェルがサミュエルを連れて中継駅——広大なフィラデルフィア中央駅——に着くと、ボールティモア行きの列車が遅れて3時間待たされる破目になる。その間に、サミュエルは初めて見る外界に対する物珍しさから、駅の構内をあちこちと見て廻る。すると、映画では、黒の上下に黒の帽子という装いをした年配の男のうしろ姿が目にとまる。うしろから見ても、その人はあごひげを生やしているようなので、少年は何となく同類かと親しみを覚えた様子で近づいてゆき、男の前に廻る。気配を感じた男が見おろすが、見知らぬ少年なので「何だ」という顔つきのまま愛想もこそもない。一方、少年の顔にはありありと期待はずれの表情が浮かぶ。相手がアーミシュでないことが一目で分かったからである。男は頬ひげ、あごひげのほか口ひげも生やしていた。絶対平和主義者のアーミシュは、口ひげを軍人の生やすものであるとして認めない。

少年にとっては、これが決定的証拠であるが、アーミシュのことに不案

内の観客には別の証拠が示されていて、不都合はないようになっている。男がいささかこれ見よがしにかかえている新聞の社名題字が、『(ザ・ジュルーサレム) ポウスト』と大きく読めるからである。アーミシュはみずからの社会で出版する週刊紙『バジェット』、月刊誌『ファミリー・ライフ』などのほかは、外界で発行されている商業的新闻や雑誌を読まない。ちなみに、『バジェット』のことは本稿が取り扱う3篇の作品全てに出てくる。つまり、その外見全体の印象や、ユダヤ人であろうことを示す愛読紙の種類から推測して、男は正統派に近いユダヤ人なのであった。もちろん、外界を全く知らない年端もゆかぬ少年には、ユダヤ人も外界の一般紙も理解を超えた事柄である。ただ、観客に対しては、ひげのたくわえ方についてアーミシュの特徴がさりげなく示されており、かつそれが分からなくともよい仕掛けまで用意されているわけで、この老若二人の男の対面は映画のみであって、小説にはない。

206 息子サミュエルはユダヤ人の男から離れたあと、駅の構内に立つ巨大な像に目をとめて思い惑う。羽の生えた長身の天使が死んだ兵士を腕にかかえて立つ裸像である。戦争に行った兵士が帰還して、この場所で死んだから天使が天国へ連れてゆこうとしているのだろうか。だとしたら天使は立派なことをしたわけであり、その記念に像を造ったのなら良いことだと思う。少年は母親のところに駆け戻って、そう話をする。レイチェルは一応、そうかも知れないがとっておいて、でも多分これはこの世から戦争をなくそうという像だと思うと自分なりの解釈を示してから、次のような会話を交す。(邦訳による。)

「イングリッシュには、戦争で死んだ人がたくさんいるのよ。そんな人たちのために像をつくるの」[母]

「どうしてそんなにたくさん？」[子]

「像のこと？」

「戦争で死んだ人のことだよ」

「何回も戦争があったからよ」

「じゃあ、なぜやめないの？」

「わからないわ、サミュエル、あたしにはわからない」

——じゃあ、なぜ[戦争を]やめないの？ 少年の疑問は単純明快にして本質を衝くものであるが、答えるのはアーミシュの大人ならずともむずかしい。この会話は小説版にのみあって、映画版にはない。後者では、少年は巨大な像を見上げて不思議な面持ちのまま立ち去るだけである。偶像を禁止するアーミシュ社会の出身者には、初めて見る偶像そのものが理解を超えた事柄であろう。このあと少年は手洗所に行って殺人事件の「目撃者」となる破目になるのだから、「なんち殺すなかれ」の戒律を守る絶対平和主義者アーミシュの社会に育つ少年にとっては甚だ苛酷な経験であるが、作品としては鮮やかな対比的効果を生み出すシークウェンスになっている。ここは小説版の方が勝れていると言えるだろう。ちなみに、アーミシュは「良心的兵役拒否者」(C.O.)として兵役を免除され、代わりに病院などで奉仕活動をすることがある。

207 殺人事件が起きれば、いよいよ警察の出番である。こうして刑事ジョン・ブックの登場となるわけであるが、小説版はジョンがどうして警察官になったかという背景の説明をする部分で、3葉の写真に言及する。その一は、母親が持っていた父親の白黒写真。父は5歳のときに死んだので、ジョンは生身の父親とは縁が薄かったが、この写真にはなじみがあったという。その二は、新聞の第1面に大見出しと共に載った父親の写真。家具職人だった父は酒屋に行ったとき、押し入った強盗を止めようとして射殺され、一躍ヒーローにまつり上げられたという。その三は、これまた当時の新聞に載ったジョン自身の写真。警察共済会から贈られた子供サイズの制服をまとった姿だという。このように、サミュエル少年が見た巨大な立像にまつわるエピソードのあとに、ジョン少年が見た写真にまつわるエピソードを置く手法は、アーミシュ社会とノン・アーミシュ社会とにおける偶像の意味を対照的に示していて鮮やかである。映画版に両者のエピソードはない。

図らずも殺人の目撃者となったサミュエルは、母親と共に、ジョン・ブックの捜査に強制的に協力させられる。翌日、三人が街のホットドッグ・

スタンドで昼食をとったとき、少年が大きなげっぶをすると、ジョンはそれを褒めて奇抜な冗談を言うものだから、かれのそれまでのタフ・ガイぶりに抵抗感をおぼえていたレイチェルも思わず笑みをもらす。これは小説版の描き方であって、同じ場面を映画版は全く別仕立てにしている。まず母子が食前の祈り (grace) をするので、先にホットドッグを頬張り出していたジョンはばつの悪い思いをする。ノーマン・ロックウェル (Norman Rockwell) の有名な絵——『サタデー・イーヴニング・ポウスト』1951年11月24日号表紙——を連想させるシーンである。次いで少年がげっぶをすると、母親が「よく食べたわね」 (“Good appetite!”) と言って褒めるのである。字幕には「いい音」と出る。ジョンは呆れたように少年を見て、思わず奇妙な笑い声をあげる。小説版と映画版のいずれが勝るか、甲乙つけがたい。前者はジョンがセンス・オヴ・ヒューマアの持ち主であることを表わしており、後者はジョンがいささかカルチャー・ショックを受けたことを示している。

208 『目撃者』は倒叙形式をとっているから、犯人は比較的早い段階で割るのであるが、この種の作品を扱う際のエチケットにしたがいが、これ以上はストーリーを追わないことにする。ただ余り筋立てを明かさぬ範囲で、アーミシュの特徴を示す事柄を二、三拾い上げておこう。

小説版『目撃者』はプロローグ、第1部から第3部、エピローグから成る。第2部の初めの方で、ジョンの運転する車がアーミシュ村で道をそれて、上に大きな箱が乗っている高い柱に衝突して倒してしまう。これは第3部でジョンが修理することになるのだが、ムラサキツバメ (purple martin) のアパートである。村ではこれが所どころに立っていて、井戸水を汲み上げるための背の高い風車と共に、村の風物詩にもなっている。もちろん、農村で虫を捕食するのは益鳥であるから、アーミシュは巣箱を提供して積極的に「共生」しているのである。

第2部の終わりの方で、ジョンは納屋を建てるのを手伝う。アーミシュの納屋は高さが12から15メートルもある巨大建造物である。あらかじめ地面で骨組みを拵えておいたものを垂直に立てるので、「バーン・レイズイン

グ」(barn raising)と呼ばれている。これをわずか一日で建ててしまう。いかにも短時間かつ大規模な作業ゆえ、30人から40人位の男たちが組み立てに参加し、女たちは食事を用意したりペンキ塗りなどの軽作業をしたりする。ジョンが手伝ったのは落雷で焼失した納屋の建て直しだというが、アーミシュは集団保険制度により損害額を支払うから、金銭面の心配をする必要がない。保険料の要らない保険である。救済の必要が生じたら、村びとは総出で隣人を助けるのである。なかでも納屋造りはアーミシュが相互扶助の精神を発揮するスペクタキュラー・イヴェントで、映画ならずとも恰好の撮影対象になる。

実はこの納屋造りの前夜に、レイチェルは深刻な問題に直面した。ジョン・ブックのような銃を持った「イングリシュ」を連れ込んで血をもたらししたこと、および車のラジオから流れる低俗な「イングリシュ」の音楽に合わせてジョンとダンスをしたことにつき、義父からたしなめられたのである。前出の聖句「楽しみをほしいままにするやもめは生けりといへども死にたる者なり」が想起されよう。義父は、監督のところに行ってレイチェルを忌避の処分にしてもらおうという噂が広まっていると言う。このように、アーミシュの「忌避」には二重の意味がある。一つは現世(*die Welt*)との接触を忌避するアーミシュ・ウェイ・オヴ・ライフの意味。もう一つは戒律違反者を追放忌避するペナルティの意味である。畢竟、両者は一に帰する。後者には段階的処分についての厳格なきまりがあるのだが、ここでは省略する。要するに、義父はマタイ伝18章15節から17節にあるイエスの教えにしたがい、まず身内として忠告し、最も軽い処分でも結果がどうなるかを、レイチェルに想起させたのであった。レイチェルは頑として罪を認めず、自分の行動は自分で判断すると宣言した。

301 レイチェルが試みたようなアーミシュ村から外界への旅とは逆の方向で、外界からアーミシュ村への旅を綴ったのが、スー・ベンダーの『プレイン・アンド・シンプル』である。原題の副題に言う『ある女のアーミシュへの旅』とは、単にアーミシュの生き方を探訪する旅であるばかりでなく、また現代に生きる女の自己探究の旅でもあった。著者はハーヴ

アードとパークレイと二つの修士号をもつ陶芸家、セラピスト、妻、2児の母。いかにもそういうアメリカ女性らしく、①自己に「誇り」をもち、②「一級の芸術家」を自負し、③「選択肢の多い人生」を良しと認め、④常に「達成」と「卓越」とを求めて怠らず、⑤「普通の主婦」がするような「家事を軽視」し、⑥「教養」を重んじる「知識階級」で、⑦アメリカ極西部パークレイに住むが、東部ニューヨークに別宅を持ち、南部フロリダに隠居する母がいるという「有産階級」の人間であった。

ところが、1982年、84年の2回にわたり中西部で一緒に暮らしてみたアーミシュはまるきり正反対で、①すべからく「謙遜」を旨とし、②芸術の概念がないので「実用」以外の物を作って飾ることはせず、「全体として生き方そのものが芸術」であると観察することができ、③「簡素にして単純」(「プレイン・アンド・シンプル」)であれとのアマンの教えを守り、④何事も達成への「過程」である「今」を大事にして、あらゆる面で他人との「同一」を求め、⑤妻は「家族のために犠牲になっているわけではない」と言って、家庭の外で働いたり、家庭経済を向上させようと考えたりはせず、⑥「この世の智慧は神の前に愚かなり」との聖書の教えによって、高等教育を排し、⑦おのれの村を離れずして「吾レ唯足ルヲ知ル」と泰然自若の生涯を送る姿は、「どっちが金持ちなのだろう。ある意味で、私は金持ちで豊かな生活をしている。またある意味で、私はとても貧しく不安定だ」と著者に反省を迫るような存在であった。総じて著者の率直かつ徹底した自己検証の姿勢は、ときとして必要な自浄能力を発揮するアメリカ人の資質をよく示していて瞠目に価いする。

302 芸術家ベンダーがみずから「魂の遍歴」、または「探索の物語」と称する旅の契機となったのは、アーミシュのキルトであった。「雷の沈黙」を守るアーミシュ・キルトは、単純な模様でありながら著者の心を強く揺り動かした。ちなみに、『ブックス・イン・プリント』最新版によると、「アーミシュ」で始まる題名の刊行書だけでも約60点にのぼるが、内キルトの案内書は9点を数える。著者が特に心搏たれたのは、古着の木綿で作られたものであるが、写真集によって見ただけでも、その深い色彩と単純な形

との組み合わせは、アーミシュがそうと意図したわけではないにもかかわらず、あたかも優れた抽象絵画を見る趣きがある。殊に「バーズ」(Bars)や「センター・スクエア」のパターンは、たとえばニューヨークのグッゲンハイム美術館で見る後期モンドリアンなどの作品を彷彿とさせる。何のことはない、二十世紀絵画の前衛に位置して高く評価される技法は、すでに十七世紀のアーミシュに先取りされていたのであった。「見よ是れは新しきものなりと指して言ふべき物あるや、其れは我等のさきにありし世々に久しくありたるものなり」(伝道之書1:10)の感を改めて深くさせられる事例である。

もう一つ外界の人間を惹きつけるのは、アーミシュ料理である。現行の料理書は10点ある。自然農法で採れた産物を材料とする料理はどれも、これぞ人間本来の食物という印象を与える。更に、勤勉なアーミシュはよく生産し、よく貯蔵する。食料保存のために努力を惜しまない。小説版『目撃者』にも、幾重にも並んだ棚に野菜や果物の入った広口壺がぎっしり保存されている部屋が出てくる。主婦はトマトの壺詰めだけでも1日に60個以上つくる。よく作るだけでなく、よく食べる。これまたどの作品にも描出されている。著者が世話になった12人家族の家で、著者を入れると13人になるが、初めの2週間で洗った皿の数が延べ3,865枚。よくも数えたものだと思うが、それは著者が皿洗いなど「普通の主婦」がやるものと見くだしていたから、いやでも意識したのでであろう。村に来て初めての食事のあと、ここにいる間は自分が皿を洗うと申し出たところ、主人が「じゃあ、いつまでもいていいよ」と冗談を言ったという。

303 アーミシュが死を賭しても聖書の教えを遵守する人間だからと言って、謹厳実直の石部金吉かと思うと、さにあらず、よく冗談を言う、ユーモアのセンスに富んだ人たちであることは、ここに扱う3篇の作品のどれにも、よく表われている。スー・ベンダーが世話になった家でも、おばあさんが「野菜スープを作る時、人参に私は豆よりおいしいと言わせたり、豆に私はキャベツよりおいしいと言わせたりするものじゃないよ。おいしいスープを作る時には、どの野菜も必要なのさ」という類いのユーモ

ラスな話ぶりで皆を楽しませたという。考えてみると、この言はアーミシュの生き方そのものをよく表わしている。

初めの2週間で大家族が出した台所のゴミは、大型ゴミ缶一杯ほどもないことに著者は気づく。あらゆるものがリサイクルされていて、しかも順序がきちんと決まっていた。アーミシュはゴミの出ない生活をしている。土地が人間と動物とに食料を供給し、人間と動物とが土地に肥料を提供する。下肥は自分たちの生産物だが、トラクターは下肥を出さないと、別の家の主人が冗談を言う。しかも馬は再生産をするが、トラクターは負債をつくるだけだと看做されている。

暑い時季になると、大人も子供もはだしでいる者が珍しくない。初めての昼食後、著者が子供たちに本を読んであげようと言うと、「うん、でも、まず水合戦をする」と答えて、大きい子も小さい子も一緒になって泥人形になるまで乱暴な水遊びに興じる。母親は笑いながら「まずシャワーを浴びるのよ」と言うのみで叱ったりはしなかった。「来てから五時間後、不健康な食べ物、真面目なアーミッシュの子供たち、厳格な母親という私の固定観念は消えた」と著者は述べている。

401 少女の眼を通して、生き生きとしたアーミシュの子供の世界と、広くアーミシュ村の生活とを描いた作品が、ミルドレッド・ジョーダンの『アーミシュに生まれてよかった』である。舞台は再びペンシルヴェニアに戻る。少女ケティは11歳のふたごで、もう一方は男の子のジェイク（ジェイコブ）であるが、二人には21歳の兄イーライと、22歳の姉ナオミがおり、ほかにも独立して別に住む複数の兄がいるらしい。兄のイーライは、はたちを過ぎて未だ洗礼も受けず、良くないとされることの数々に手を出しているという。たとえば自動車を乗り回す、映画を観にゆく、ラジオを聴く、タバコを喫う、髪の毛を短く刈るといった類いのことである。ジェイクはその兄が納屋に隠し持つラジオを見つけて、密かに連続物のカウボーイ物語を聴いている。それをケティが見咎めるのだが、ケティ自身がラジオから流れる甘美な音楽の魅力に取り付かれてしまう。物語はこうしてジェイクの秘密である「ラジオの行方」を主な筋として進行する。

ところが、不運にも落雷によって納屋が焼失する事件が起きる。アーミシュは避雷針を神と人間との間に置く障害物であるとして設置するのを嫌うので、時たま落雷による火事にあうのである。ケティはラジオのせいだ神様の罰がくだったのだと恐れる。父は全ては神の思召しと受け容れる。納屋は村中の力で再建された。そう言えば、『プレイン・アンド・シンプル』でも、著者が「どうやってお金を集めるの」と尋ねたとき、おばあさんが「出せるだけ出すのよ」と事もなげに答えていた。こうしてラジオの忌避から納屋造りへと、アーミシュの特徴をつなげた、うまい筋の運びになっているのだが、のちにジェイクは、みんなラジオを隠して聴いているんだからと言う。落雷ならぬラジオやテレビの電波は、現代のアーミシュを容赦なく襲っているのである。小説版『目撃者』にも、サミュエル少年が母と共に一泊したジョン・ブックの姉の家で、そこの子供たちとテレビの漫画映画を観てしまう場面があった。映画版には、そのエピソードはない。

402 ケティ自身にも秘密が出来る。ジェイクの秘密が筋立ての主流とすれば、これは副流になる。今は中西部のシカゴに住む、隣のルーテル派一家の母親が入院したため、村に残る祖母に預けられているグロリアが、ケティの学校に転入してきたのだが、この少女は当然のことながら「イングリシュ」の習俗に染まっていて、ケティが見たこともない物をたくさん持っている。「カール」した金髪で「赤い服に赤い靴下」、「金のプレスレット」を身につけていて、いかにもグロリアの名が似つかわしい。なかでも眼を惹いたのは、美しい「映画女優」の「写真」が入っている「赤いハート型ロケット」だった。偶像と虚飾とを排するアーミシュの規律に反するものばかりである。グロリアはケティから分けてもらったハーフムーン・パイのお礼だと言って、そのロケットを貸してくれた。ケティはそれをタンスに隠し、毎晩取り出しては、うっとり眺めるのだった。一方では罪の意識にさいなまれながら、他方では持ち主に返すことを一日延ばしに延ばしている。

けっきょく偶然のことから、ラジオは両親と「イングリシュ」の訪問者

とに、ロケットは母と牧師夫人とに見つかってしまうのだが、ラジオのときは叱られはしたものの余り深く追求されることはなく、ロケットにいたっては母は何も言わない。たまりかねたケティが何故なのか尋ねてみると、母は「もう十分反省したでしょ」と言うのみ。お母さんはアーミッシュが禁じている物を欲しかったことはないのという問いに、自分もお前の年頃にはあったよと答えたので、ケティは母を一層身近に感じる。そればかりか「もう決して悪いことはしません」と誓う娘に、母は「そんなことは無理なのよ。でもね、いつもアーミッシュ宗派のきまりに戻ることが大切なの」と諭すのだった。ここには悪ふざけと言ってもいいほどの泥んこ遊びをする子供たちを笑って見ていた、あの『プレイン・アンド・シンプル』に出てくる母親と同じような寛大さがある。

アーミッシュ社会では、洗礼を受ける前の子供たちには、ある程度まで規律違反を大目に見る習慣がある。ただし、全くの放任というわけではなく、時には厳しいお仕置きを加えることもある。たとえば、ジェイクが悪態をついたとき (swearing) に、父親はヒッコリーの笞で体罰を加えた。それはジェイクが柵の点検を怠ったため、仔牛がトウモロコシ畑に入り込み、次の日に腹をこわして死んでしまったとき以来のことだった。アーミッシュの子供は4、5歳から両親の手助けを始め5、6歳から徐々に責任を負わされるのである。ふだんは穏やかで優しい父も、ときとして旧約聖書の神のごとき厳しい父の姿を表わす。

501 日本で1990年までに上映された、ミステリー／サスペンスものの洋画からベスト・テンを選ぶアンケートに応じて、歌人の塚本邦雄氏は『目撃者』を第4位に挙げた。その理由を「最もスリリングで、サスペンスに満ちた文学は旧約聖書であるという観点から、選びたかった」と述べているのが、いかにもこの人らしい。アーミッシュは旧約聖書に劣らず新約聖書をも重視しているのであるが、『目撃者』に出るアーミッシュを旧約的と観るのは、あながち故なきことではない。男も女も皆、ダニエル、イーライ(エリ)、ジェイコブ(ヤコブ)、ジョウブ(ヨブ)、レイチェル(ラケル)、レベッカ(リベカ)、サミュエル(サムエル)のように旧約的ファースト・

ネイムが与えられているからである。これに対して、アーミシュ村に侵入する「イングリシュ」は新約の名前のジョン（ヨハネ）であり、その上司はポール（パウロ）であって、対照的存在を示している。

旧約に出てくるレイチェルはジェイコブの妻、2児の母とされ（創世紀29：28, 30：23-24, 35：16-18, 35：24）、「嘆き悲しみいたく憂ふる声ラマに聞こゆ、ラケルその子供のために嘆き、その子供のあらずなりしによりて慰めを得ず」（エレミヤ記31：15）と録されている。これは言うまでもなく新約聖書に、暴虐非道のヘロデ王が「ユダヤびとの王」として生まれたと聞くイエスを無き者にせんと、ベツレヘム一帯の2歳以下の男児をことごとく殺戮し、「ここに預言者エレミヤによりて言はれたる言葉は成就したり。曰く、『声ラマにありて聞こゆ、嘆きなり、いとどしき悲しみなり。ラケルおのが子らを嘆き、子らのなき故に慰めらるるをいとふ』（マタイ伝2：17-18）と録される典拠となるのである。

ほかならぬ、メルヴィルの『白鯨』第128章「ピークオド号、レイチェル号に邂逅す」は、この聖書の話に依拠している。海上で行方不明になったレイチェル号船長の息子二人の内一人は12歳であるとされ、レイチェル号は特にこのいたいけな子を探し求めて、曠漠たる洋上を蹠跟とさまよう。これを旧約の悪王と同名の船長エイハブ（アハブ）は冷然と見離す。『目撃者』に出てくるレイチェルも、亡夫の名をジェイコブと言い、息子は一人しかいないが、11歳のサミュエルを巨大な権力の暴虐により失うのではないかと恐れおののく母の姿として描写されている。

一方、刑事ジョン・ブックは、映画版では少々粗野なタフ・ガイとして姿を現すが、小説版では粗野な言動は見られるものの、仲々にユーモアを解する男で、ジェイムズ・ジョイスが使った言葉は「エピファニー」でよかったんだっけと頭をめぐらすこともある、ちょっと信じられないインテリ刑事として描かれている。この物語のように、一人の異能の男がある村／町にやって来て、何事かを成し遂げて去ってゆくという筋立ては、古典的西部劇のパターンを踏襲した作品であり、西部劇であると否とにかかわらず、ジャック・シェイファーの『シェイン』（Jack Schaffer: *Shane*, 1949）

や、ウィリアム・E・バレットの『野のユリ』(William E. Barrett: *The Lilies of the Field*, 1962), 女流N・H・クラインバウムの『いまを生きる』(N. H. Kleinbaum: *The Dead Poets Society*, 1989) をその好例として挙げる事ができる。

502 いかにも映画版『目撃者』が今様の造りになっていると思わせるのは、小説版に出てくるタバコ栽培の話が全く目に映らない点である。ただし、納屋造りの場面にパイプを手にする農夫が一人出ていた。実はアーミシュ社会では原則として禁酒禁煙であるにもかかわらず、タバコの葉を盛大に栽培している。「イングリシュ」に売ると、ちょっとした現金収入になるからである。『アーミシュに生まれてよかった』に出てくる父親にいたってはタバコの栽培者であるばかりでなく、また葉巻の愛好者でもあって、妻にたしなめられると、「やれやれ、聖書のどこにタバコを喫っていけないって書いてあるんだい?」と言ってすましている。イーライ兄さんも葉巻を喫うのは、ほかにもしているよくないことの一つか。弟のジェイクは11歳の子供でありながら、父さんから自由に使える小さなタバコ畑をもらっている。ケティが母さんからヒヨコをもらった代わりだという。

一方、小説版『目撃者』にも当世風に造られているところがある。女が男の上に権を執ることを許さずという、きょうびフェミニストならずとも目を剥くような原則に立つ社会にあって、レイチェルがポールティモア行きにつき義父が諫めることを肯じなかったり、自分の言動は自分で判断しますと断固宣言したりするところである。ほかにも、子供は一人でたくさんと思うところも、出産の選択権は女にあると考える一部外界の風潮を反映していよう。いわゆる「自立する女性」なるものを打ち出しているわけである。こういう仕立てになっているについては、作品の原案が脚本家の一人E・W・ウォレスの夫人パミラによるものであったという事実と深い関係があろう。ただ、あれほどアーミシュの生き方に疑問を感じていたレイチェルであったが、自分の判断で「イングリシュ」の世界に飛び出してみたものの、たちまち想像を絶する恐怖を体験し、けっきょくは自分が根っからのアーミシュであって、それ以外の何者でもないとの自覚にいたる

のである。そういう「良識」に戻ったことを神に感謝さえしている。いずれダニエルとも結婚して、ランカスター郡の大地に生きるのだと思うまでになる。映画版では、そこまではっきりとは描いていない。いや、むしろ描けなかったと見るべきか。

いわゆる「自立する女性」を自負する点では人後におちないスー・ベンダーは、アーミシュ社会で生活体験をしたあと、自分はアーミシュにはなれないし、またなりたいたも思わないと言っている。ただ、その体験の前と後とで著者は自分のはっきりと変わったことを自覚していて、その方向がレイチェルと同方向であるところが興味深い。すなわちレイチェルはアーミシュから離れようとしてアーミシュへ戻るのに対して、ベンダーはノン・アーミシュから離れてノン・アーミシュへ戻るのだが、それは単に空間的回帰にすぎず、精神的にはアーミシュの方にベクトルがはっきりと転回したのである。

503 どうやら、昨今、世の中も同じ方向へ転回し始めたらしい。日本では環境庁の後援で企業62社が、表土の流出防止をアーミシュに学べという意見広告を出す御時勢になった。アーミシュが変わるのではなく、世の中が変わるのである。たまたま本稿を執筆中（1994年11月20日）に、福田恆存氏が亡くなったが、かつて孤軍奮闘していた氏も、「世の中が變つたので、私の考へ方が正しかったといふ事になっただけの話である」と、エッセイ「言論の空しさ」（1980）で述べていた。時あたかも「自立する女性」なるものの典型と目されていたヒラリー・クリントン女史が世の中の変化を察知して、急遽、神に祈る恰好をテレビ・カメラの前に見せたのだが、時すでに遅し。中間選挙という名の総選挙において、いつも気まぐれな有権者までもが明白な「否」（“Nay”）の評決を下したのである。しかしながら、クリスチャンでもない本稿筆者でさえ、イエスがこう教えたと承知している。「なんぢら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顯はさんとして、会堂や大路（おほち）の角に立ちて祈ることを好む。誠になんぢらに告ぐ、彼らは既にその報いを得たり。なんぢら祈るとき、おのが部屋にいら、戸を閉じて隠れたるに存すなんぢの父に祈れ。さらば隠れたるに見

給ふなんちの父は報い給はん」(マタイ伝6：5-6)と。旧派アーミシュは制度や建造物としての教会を持たず、各戸回り持ちで納屋に集まって祈る。集まるときは150人も集まるから、その用もあって納屋を巨大に造るのである。職業牧師を認めず、牧師役は籤引きで決める。当選した者は本業のほか生涯無給でこの職を全うするのである。この慣行は『アーミシュに生まれてよかった』にも記述されている。ちなみに、この選出方法は聖書の「かくて籤せしに、籤はマッテヤに当たりたれば、彼は十一の使徒に加へられたり」(使徒行伝1：26)に依拠している。

スー・ベンダーがアーミシュの生き方に接して、貧富の尺度につき疑問を抱いたことも、いち早く福田氏のエッセイ「アメリカの貧しさ」(1955)に先取りされていた。近頃の「清貧の思想」より40年も前のことである。

504 げに「預言者は故郷に容れられず」、世の中は暴走し、かつ流転するものである。アーミシュの場合も、1万メートルのトラック競走で1周おくれになった走者が、あたかも他のランナー集団の先頭を切るがごとく見ゆるに同じい。

やはり本稿の執筆中、鈴木孝夫名誉教授の『人にはどれだけの物が必要か』が出版されたが、そこに披瀝されている生き方はリサイクルを重んじる点では旧派アーミシュと共通するところが認められるが、かれらのような禁止規制を排する点では明白に違うようである。自動車や電気製品などの制限的使用を認めるピーチー・アーミシュとも異なるであろう。あるいは特定宗教を基盤にしない点で、十九世紀アメリカの文人ヘンリー・D・サロウ(ソロー)が『森の生活』(Henry D. Thoreau: *Walden*, 1854)で力説した「暮しは低く、想いは高く」(ワーズワース)の生き方——明治の日本人はこれを「質素之生活、高遠之理想」と訳した——と連なる面があるとも考えられるが、ただサロウの場合は、「人の富める度合いは、入手せずに放っておける物の数に比例する」という考え方に徹しただけで、地球的規模で省資源の必要を痛感しなくてよい時代の人だったところが鈴木氏の場合と異なる。

ちなみに、サロウの思想的源泉には中国・印度の経典があるのだが、ど

うやら欧米人は人生の智慧を東方に求めるものらしい。すでにして聖書自体がそうであるが、ひとところよくクリスマスの贈り物にされた『預言者』(The Prophet, 1923)の著者カール・ジブラン(Kahlil Gibran)はレバノン生まれの詩人である。ベンダーの書にも禅僧が言う自己の減却や、チベットの賢人が伝える自己の受容が引用されている。

あたかも過度に肥大化した現代人の生活に鏡を突きつけるように、『アーミシュに生まれてよかった』は最後のクライマックスを競売に置く。ルーテル派の隣人が移転するにつき農場と家財を売りに出したのである。その様は「まるで家が物を吐き出したみたいだね」と、少年ジェイクまでが笑う。十九世紀のサロウはすでに『森の生活』で、そういう状態の現出を嗤っていた。ケティの物語は子供向けながら、アーミシュの特徴をふんだんに盛り込んだ旧派アーミシュの案内書として読むことができ、物語としてもよく出来ていて、大人の鑑賞に耐える作品になっている。『プレイン・アンド・シンプル』も同様の案内書として読むことができる。

かつてアーミシュは世界を変えようと死を賭して戦った思想的過激派であった。こんにちアーミシュは伝道をする事なく、おのずから現代のアンチテーゼを示すことにより、静かに世界の変革をうながしているように見える。

参 考 資 料

第1次資料

〔文学作品〕

Bender, Sue. *Plain and Simple: A Woman's Journey to the Amish*. New York: Harper & Row, 1989.

<邦訳>スー・ベンダー『プレイン・アンド・シンプル/アーミッシュと私』(伊藤礼訳), 鹿島出版会, 1992年。

Jordan, Mildred. *Proud to Be Amish*. New York: Crown Publishers, 1968.

<邦訳>ミルドレッド・ジョーダン『アーミッシュに生まれてよかった』(池田智訳), 評論社, 1992年。

Kelley, William, and Earl W. Wallace. *Witness*. New English Library. Fal-mouth, Cornwall, England: Hodder and Stoughton, 1985.

<邦訳>W・ケリー, E・W・ウォーレス『刑事ジョン・ブック／目撃者』(宮脇孝雄訳), 角川文庫, 角川書店, 1985年。

〔映 画〕

Weir, Peter, dir. *Witness*. With Harrison Ford and Kelly McGillis. Paramount Pictures, 1985.

<日本版>『刑事ジョン・ブック／目撃者』, CIC・ビクタービデオ, 1989年, 112分。

第2次資料

〔研究書〕

Ahlstrom, Sydney E. *A Religious History of the American People*. New Haven and London: Yale University Press, 1972.

Hostetler, John A. *Amish Society*. 1963. 4th ed. Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 1993.

Wood, Ralph, ed. *The Pennsylvania Germans*. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1942.

坂井信生『アーミシュ研究』, 教文館, 1977年。

〔論 文〕

Engle, T. L. "Attitudes Toward War as Expressed by Amish and Non-Amish Children." *Journal of Educational Psychology* 35 (1944): 211-19.

Smith, Elmer Lewis. "Personality Differences between Amish and Non-Amish Children." *Rural Sociology* 23 (1958): 371-76.

Wittmer, Joe. "Homogeneity of Personality Characteristics: A Comparison between Old Order Amish and Non-Amish." *American Anthropologist* 72 (1970): 1063-68.

大原長和「アーミシュ家族の構造と機能」, 『家族の法社会学』, 法律文化社, 1965年, 132-52頁。

古野清人「アメリカの保守的小教派——アーミシュとハターライト——」, 『宗教生活の基礎構造——その社会・文化的研究』, 社会思想社, 1971年, 157-92頁。

〔案内書〕

Hughes, Robert. *Amish : The Art of the Quilt*. 1990. Plate Commentary by Julie Silver. New York : Alfred A. Knopf, 1993.

McLary, Kathleen. *Amish Style : Clothing, Home Furnishing, Toys, Dolls, and Quilts*. Bloomington and Indianapolis : Indiana University Press, 1993.

Seitz, Ruth Hoover. *Amish Country*. Photography by Blair Seitz. New York : Crescent Books, 1987.

Weaver, William Woys. *Pennsylvania Dutch Country Cooking*. Photography by Jerry Orabona. New York : Abbeville Press, 1993.

〔記事〕

Gehman, Richard. "Plainest of Pennsylvania's Plain People : Amish Folk." Photography by William Albert Allard. *National Geographic* August 1965 : 227-53.

Lascas, Jeanne Marie. "Fire, Hope and Charity." Photography by Bob Sacha. *Life* June 1992 : 84-92.

"The Right to Be Different." *Time* 29 May 1972 : 32-33.

Shalala, Nancy. "Amish people remain witness to history." *The Japan Times* 19 January 1995 : 14.

坂井信生「自動車を拒否するアメリカ人——アーミッシュ村滞在記」, 『中央公論』1975年4月号, 198-206頁。

〔録画〕

The Amish Riddle. Prod. EKIS, Switzerland, 1990.

<日本版> 「アーミッシュの世界／現代文明を拒否する人々」, NHKテレビ, 1992年3月15日, 45分。

〔映画資料〕

Walker, John, ed. *Halliwel's Film Guide*. 8th ed. New York : Harper Perennial, 1992.

『アカデミー賞』, 教育社, 1990年。

『キネマ旬報』930号, 「1985年度ベスト・テン発表」, キネマ旬報社, 1986年。

『ミステリー・サスペンス洋画150』, 文春文庫ビジュアル版, 文藝春秋, 1991年。

米田由美「刑事ジョン・ブック 目撃者／この映画との出会いはカルチャーショックだ」, シネマハウス編『刑事アクション!』, 洋泉社, 1991年, 21-22頁。

〔その他〕

阿部知二『良心的兵役拒否の思想』, 岩波新書, 岩波書店, 1969年。

全面広告「この星と、ともに生きていくために」, 『毎日新聞』1992年2月18日朝刊, 10面。